

極低出生体重児の発達研究（8）

—中学生時期における自己意識についての検討—

母子保健研究部 安藤朗子
嘱託研究員 栗原佳代子（東京大学）
客員研究員 川井 尚
愛育相談所 平岡雪雄
愛育病院 佐藤紀子・石井のぞみ・山口規容子

要 約

愛育病院では、NICU を退院した極低出生体重児の長期フォローアップの一環として、中学 2 年生ないし 3 年生の時期に健診を行っている。本研究は、中学生健診を受診した児を対象に、自己意識について検討することを目的とした。対象は、極低出生体重児 41 名（男子 18 名、女子 23 名）である。方法は、改訂・自己知覚尺度日本語版：児童版（眞榮城ら、2007）とインタビューを実施した。さらに、同時に行った WISC-III 知能検査結果と身体計測値との関連も検討した。主な結果としては、対象児の自己についての評価は全体的に肯定的な評価であり、標準化児童版の結果と比べて差がみられなかった。体格などを理由にいじめられる子どもがいることから対象児の容姿の評価が低いのではないかという仮説は支持されなかった。男女ともに、特に運動の評価が低いことが特徴的であった。全体的な自己価値感には容姿の評価の関連が最も強く、これは一般の児童・生徒の特徴と一致するものであった。インタビュー調査からは、小さく生まれたことに対して 6 割の子どもたちは現在の自分にとって影響はないと捉えているが、3 割の子どもは体格や身体的な障害や問題に影響していると捉えていることが明らかにされた。小さく生まれたことについての認識は、その説明のされ方によって影響を受ける可能性が示唆された。今後も対象児の心理・社会的な発達を理解するために自己意識の発達を捉えることは意義のあることと考察された。

キーワード：極低出生体重児、中学生、自己意識

A Research on the Very Low Birth Weight Children's Development (8): Study of the self-consciousness in junior high school time

Akiko ANDO, Kayoko KURIHARA, Hisashi KAWAI, Yukio HIRAOKA,
Noriko SATO, Nozomi ISHII, Kiyoko YAMAGUCHI

Abstract : In Aiiku Hospital, a medical examination is performed on second- or the third-year junior high school students as part of the long-term follow-up of very low birth weight infants discharged from the Neonatal Intensive Care Unit(NICU). This research studied self-consciousness in junior high school students who received the medical examination. The subjects were 41(18boys, 23girls) children who were born with very low birth weight. We investigated the revised versions of the self-perception profile for children in Japan (Maeshiro et al., 2007) and conducted interviews with them. Furthermore, we examined the relationship between self-consciousness and scores on the WISC-III, and on the physical measurement . As main results, generally, the children had positive self-perception profile, which did not differ from the self-perception profile of an average Japanese child. The hypothesis that children with very low birth weight would rate themselves as low on self-appearance was not supported. Both boys and girls generally scored themselves as low on motor skills. Self-appearance evaluation affected self-value, in both the subjects and the average Japanese children. Although 60% of the subjects understood that their present selves are not influenced by the fact that they were born very small, 30% of them believed that being born very small had affected their physiques. How the children perceive the fact that they were born very small depended on how it was explained to them. It is therefore important to measure self-consciousness in very low birth weight children to understand their psychosocial development.

Key Word : children with very low birth weight, junior high school student, self-consciousness

I. 研究目的

愛育病院では、1996年よりNICUを退院した極低出生体重児の長期フォローアップが行われている。フォローアップは、ハイリスク児の支援及び他施設共同のフォローアップを目的に結成されたハイリスク児フォローアップ研究会によるプロトコールに基づいて、4つのキーエッジ、修正1歳6か月、3歳、6歳（就学前）、9歳の時期に行ってきた。2010年からは、13歳ないし14歳（中学2年あるいは3年生）の健診を開始した。

健診では、身体発育等に加えてその時々の発達上の問題や心理的問題に対する相談も行っている。小さく生まれた子どもたちの多くが元気に楽しく学校生活を送っているようであるが、時に体格や容姿やハンディキャップに対する冷やかしいじめについての相談を受けることがある。特に、一般的にみても中学生時期、いわゆる思春期を迎えた子どもたちは、自分の容姿等の外見や性格等の内面についての悩みを感じやすい時期といえる。

そこで、本研究では、思春期年齢を迎えた極低出生体重の子どもたちが、自分のことをどのように認識しているのか、自己意識に焦点を当てて検討することを目的とした。

II. 研究方法

1. 対象と調査・インタビューの時期

対象は、1996年3月から1998年2月までに出生しNICUを退院した児のうち、中学生健診の呼びかけに応じて来院した児43名中、自己意識調査を実施できた41名（男子18名、女子23名／平均年齢14歳0月16日：13歳6月0日～14歳6月20日／中学2年33名、中学3年8名、）を対象とした。平均出生体重は1,148g(716g～1,496g)、平均在胎週数は、29週4日(24週3日～36週0日)、SGA(Small for Gestational Age)の程度の平均は、-779である。SGAの程度は、本研究において便宜的に利用するもので、出生時体重基準曲線の平均を基に標準偏差(SD)をその指標とした。マイナスSDの値が大きいほどSGAの程度が強い、すなわち出生体重が在胎週数に対して小さいことを示す。

なお、対象児には、歩行可能な脳性麻痺児3名（男子2名、女子1名）、弱視（1名）、点頭てんかん（1名）が含まれる。

調査・インタビューの時期は、2010年7月～8月及び2011年7月～8月である。

2. 方法

(1) 自己意識の測定

改訂・自己知覚尺度日本語版：児童版（眞榮城ら,2007）

¹⁾を実施した。

自己知覚尺度は、Harter（1985、1988）によって作成

された尺度をもとに、眞榮城ら（2007）が日本語版（児童版・青年版・大学生版）を作成したものである。児童版は、小学3年生から中学2年生が対象範囲であるため、本研究では児童版を使用した。尺度は、学業能力、運動能力、容姿、友人関係、道徳性の5側面と、それらの上位概念として全体的自己価値感の側面から成り立っている。各側面6項目で構成され、“あてはまる”から“あてはまらない”までの4段階評定である。項目は、付録参照されたい。評価の高い（ポジティブ）反応から4,3,2,1点と得点化した。

(2) インタビューの実施

内容は、1) 現在の自分の長所・短所、2) 小さく生まれたことをa)いつ頃、b)誰に、c)どのように説明されたか、d)そのときどのように思ったか、3) 小さく生まれたことが今の自分にどのように影響している、あるいはしていないか、等についての質問を行った。

(3) WISC-III知能検査法²⁾を実施し、自己意識との関連を検討した。

(4) 健診時行われた身体計測値の中で身長、体重、体脂肪の計測値を使用し、自己意識との関連を検討した。

なお、統計分析にはPASW Ver.18.0を使用した。

3. 倫理的配慮

本検査は、愛育病院発達外来における長期フォローアップ（健康診査）の一環として行われている。健診に訪れた際に、「医療情報提供のお願い」の文書と口頭にて、データは個人が特定されない形で統計資料として使用されること、データ使用の承諾をしない場合でも不利益を被ることは一切ないこと、極低出生体重で生まれたことへのインタビューを行うこと、等について保護者に説明を行い、承諾書に署名を得た。また、本研究は、愛育病院の倫理委員会に審査を求め、承認を得た。

III. 研究結果

1. 自己知覚尺度について

(1) 対象児の自己知覚尺度結果

1) 各側面の平均値

対象児の自己知覚尺度の各側面の平均値（合計得点を項目数で除した1項目あたりの平均値）と標準偏差を男女別に求めた。なお、表1には、先行研究との比較のため、児童版（眞榮城ら,2007）と中学生を対象にした繁多・眞榮城（2003）³⁾の結果を併記したが、それらについては(2)先行研究との比較で触れる。

対象児は、すべての側面の平均値が、2.0以上であり肯定的か肯定的かという観点でみると肯定的評価と言える。しかし、-1標準偏差の範囲でみると、男女ともに学業と運動能力のみに否定的評価の者が含まれた。

表1 対象児・児童版(眞榮城, 2007)・繁多・眞榮城研究(2003)の自己知覚尺度の各側面の平均値(標準偏差)

	対象児 男子(n=18)	対象児 女子(n=23)	児童版 男子(n=129)	児童版 女子(n=152)	繁多・眞榮城 研究(中2) 男子(n=123)	繁多・眞榮城 研究(中2) 女子(n=126)
全体的自己価値感	2.68(.49)	2.68(.39)	2.90(.68) ^{c)}	2.71(.72) ^{d)}	2.53	2.33
学 業	2.56(.59)	2.45(.46)	2.62(.72)	2.55(.68)	2.46	2.34
運 動	2.44(.65)	2.07(.54)	2.64(.63) ^{a)}	2.22(.68) ^{b)}	2.69 ^{c)}	2.28 ^{d)}
容 姿	2.70(.69)	2.59(.53)	2.71(.67) ^{a)}	2.37(.70) ^{b)}	2.59 ^{c)}	2.19 ^{d)}
友 人	2.70(.50)	2.62(.40)	2.63(.47) ^{a)}	2.48(.45) ^{b)}	2.50	2.48
道徳性	2.72(.52)	2.45(.35)	2.52(.57)	2.56(.53)	2.66	2.61

注1) 児童版で性差の認められた箇所：有意確率^{a)}, ^{b)} 間 $p < .01$, ^{c)}, ^{d)} 間 $p < .05$

注2) 繁多・眞榮城研究は、平均値のみ

表2 重回帰分析結果

モデル集計(b)

モデル	R	R2乗	調整済みR2乗	推定値の標準誤差
1	.723 ^{a)}	.522	.443	2.001

a. 予測値：(定数)、道徳性評価、容姿評価、友人関係評価、運動能力評価、学業能力評価。

b. 従属変数：全体的自己価値感

係数(a)

モデル		非標準化係数		標準化係数		t 値	有意確率
		B	標準偏差誤差	ベータ			
1	(定数)	.219	3.091			.071	.944
	学業能力評価	.257	.137	.303		1.871	.071
	運動能力評価	-.067	.103	-.095		-.655	.518
	容姿評価	.371	.107	.482		3.463	.002
	友人関係評価	.153	.136	.157		1.121	.271
	道徳性評価	.308	.165	.296		1.874	.071

a. 従属変数 全体的自己価値観

2) 各側面間の関係についての検討

まず、各側面間の相関関係を検討した結果、有意な相関がみられたものは次の通りであった。

- ・全体的自己価値感と学業 ($r=.429$, $p<.001$)、容姿 ($r=.505$, $P<.01$)、道徳性 ($r=.455$, $p<.01$)
- ・学業と道徳性 ($r=.544$, $p<.001$)
- ・友人と運動 ($r=.352$, $p<.05$)、容姿 ($r=.316$, $p<.05$)

次に、5 側面の上位概念として捉えられている全体的自己価値感を従属変数、他の 5 側面を独立変数として重回帰分析を行い、結果を表 2 に示した。調整済み決定係数 (R^2) は .552、標準化係数 (ベータ) から容姿 (.482) が全体的自己価値感に最も影響力があることがわかった。

3) 性差の検討

全体自己価値感は男女同じ値であったが、それ以外の側面は男児の方が女児よりも平均値が高かった (高い方がよりポジティブとなる)。運動能力においては、有意水準 $p=.053$ で有意な傾向がみられたが、他の側面には有意な性差は認められなかった。

4) 自己知覚と関連する要因の検討

① 出生体重、在胎週数、SGA の程度との関連は認められなかった。

② WISC-III 知能検査結果との関連については、6 つの側

面の中で学業の評価のみに、VIQ ($r=.471$, $p=.002$)、FIQ ($r=.425$, $p<.006$)、言語理解群 ($r=.460$, $p<.003$)、注意記憶群 ($r=.404$, $p<.01$) と有意な正の相関関係が認められた。

③ 現在 (健診時) の体格との関係

健診時の男女別の平均身長、体重、体脂肪は表 3 の通りであった。そして、健診時の身長、体重、体脂肪との相関をみたところ、男女に違いがみられた。

男子は、現在の体重と学業の評価との間に有意な正の相関 ($r=.520$, $p=.039$)、体脂肪と運動能力の評価との間に有意な負の相関 ($r=-.529$, $p=.035$) が認められた。

女子は、現在の体重と容姿 ($r=-.514$, $p=.014$)、及び体脂肪 ($r=-.535$, $p=.013$) との間に有意な負の相関が認められた。

表3 健診時の男女別身長及び体重

	平均値	標準偏差	最小値	最大値	性差
身長					
男子 (n=17)	157.57	6.104	144.9	166.5	P=.008
女子 (n=22)	151.96	6.201	140.6	164.8	
体重					
男子 (n=17)	44.75	8.365	30.0	66.6	n. s.
女子 (n=22)	42.12	5.465	28.1	55.7	
体脂肪					
男子 (n=16)	16.28	6.49	9.0	33.0	P=.031
女子 (n=22)	20.83	5.83	12.0	35.5	

(2) 先行研究との比較

児童版 (眞榮城ら, 2007) との比較を男女別に行ったところ、すべての側面で有意な差は認められなかった。

児童版では、道徳性を除くすべての側面で男児の得点が女児よりも高く、中でも全体的自己価値感、運動能力評価、容姿評価、友人関係評価では、男子の評価が女子よりも有意に高い。また、各側面間の相関については、全体的自己価値感と容姿 ($r=.71$, $p<.01$)、道徳性 ($r=.58$, $p<.01$) が認められた。

繁多・眞榮城 (2003) は、都内の公立中学に通う中学 1 年生から 3 年生を対象に、Harter (1988) に基づき翻訳された自己評価尺度の改定版 (眞榮城, 2003) ⁴⁾ を使用して調査を行った。本研究と同じオリジナル版を翻訳したものであるが、本研究で使用した尺度の文言が若干異なるなど、全く同じ尺度ではないため、あくまでも参考資料として使用した。この研究では、男子はすべての側面で女子よりも評価が高く、中でも運動能力評価と容姿評価では有意差 ($p<0.05$) が認められた。この研究の標準偏差が得られず統計的な検定はできなかったが、本研究の対象児の結果と比較した結果、男子は運動能力評価、女子は運動能力評価と道徳性評価において対象児の方が低かったが、その他の側面は対象児の方が高かった。

2. インタビューの結果

(1) 自分の長所と短所について

現在の自分の長所と短所について尋ねた結果を、人数の多い順に、その割合とともに表 4 と表 5 に示した。

表 4 長所

	人数	%
優しい	7	17.1
あきらめない、最後までやる、がんばる	6	14.6
明るい	5	12.2
人に左右されない/人に合わせられる/人を許し受け入れる/元気/温厚/集中力がある/友達が多い/計画通りにやる/考えて行動する/絵がうまい/手先が器用/スポーツがうまい	各 1 (×12)	29.3
わからない	5	12.2
ない	3	7.3
合計	41	100.0

表 5 短所

	人数	%
すぐ怒る、切れる	6	14.6
すぐあきらめる	3	7.3
会話が苦手・うまく話ができない	3	7.3
勉強ができない・国語力がない	3	7.3
片づけられない・そうじをしない	3	7.3
決断に時間かかる・決断が遅い・考え過ぎる	3	7.3

マイナスの方向に考える/他の人に関心をもっていない/ぼっとして見えるところ/すぐ悪口を言ってしまう/言葉遣いが悪い/弟にちょっかいを出す/ダラダラしている/外見がいや (背が小さい、顔の輪郭がおかしい)/無精者/物にあたる/声が通らない/嫌なことを後回しにする/飽きっぽい/自己中心なところ

わからない	2	4.9
ない	2	4.9
合計	41	99.9

(2) 極低出生体重児で生まれたことについて

1) 小さく生まれたことを a) いつ頃、b) 誰に、c) どのように説明されたか、d) そのときどのように感じたかについての質問に対する回答は次の通りである。

a) 「いつ頃」

回答は、やや記憶があいまいではっきりした回答ではなかったが、整理すると以下の通りであった。小さい頃 (5 人)、小学校低学年 (9 人)、小学校中学年 (8 人)、小学校高学年 (4 人)、小学校時代 (7 人) 最近 (1 人)、不明 (7 人) であった。なお、小学校の中学年あたりで、自分史を書く、あるいは自分の生育歴のアルバムをつくるため親や家族に自分の生まれた時のことを聞いてくるという学校の宿題があり、そのときに自分が小さく生まれたことを聞いたという児が 10 人いた。

b) 「誰から」

母親 (26 人)、親 (5 人)、両親 (4 人)、家族 (1 人)、不明 (5 人) であった。

c) 「どのように説明されたか」

具体的には覚えていない、わからないという回答が 13 人 (31.7%) で多かったが、回答のあった 28 名の内容を単語レベルで整理すると表 6 の通りであった。

表 6 小さく生まれたことをどのように説明されたか (複数回答)

	件数
(すぐく) 小さかった	15
〇〇グラム、体重	7
大変	5
未熟児	4
手のひらにのるくらい、大きさを手で示して (2・3 か月・予定日より) 早く生まれた	4
保育器	3
呼吸器	2
心配	1

その他は、次の通りである。

「さらっと聞いた」、「親もがんばった」、「病院が急きょ決まった」、「母も危険な状態だった」、「手紙に書いてくれた」、「絵に描いてくれた」、「もしかしたら目がみえなくなるかもと言われ母が泣いた」、「ミルクが大嫌いで、ハイハイが遅かった」、「いろんな人に助けてもらったので、恩返しできるような立派な人になりなさい」、「双子だったから栄養が二人に必要なだったので小さくなった」

d) 「そのときどのように感じたか」

そのときどう思ったかについては、回答のあった 36

人中、「ふーん（という感じ）/そうなんだ/別に/特に思わなかった」という回答が14人で最も多く、次いで「大変だったんだ」（4人）、「覚えていない」（4人）であった。その他意味合いが似ているものをまとめると、「びっくりした（姉の写真と違うので/学校で発表したとき/学校でアルバムを作るとき周りとは違うから）」（3人）、「（親は）一生懸命育ててくれたんだな/自分のこと大事に思ってくれてたんだな」（2人）、「体格が小さい/やせている理由がわかった」（2人）、「体に問題がないから幸せ/今は丈夫だからいいかな」（2人）であった。他は、個別の回答であり、比較的詳しく語っているのが特徴的である。その内容は、次の通りである。

「（母親が生まれたときの大きさを絵に描いてくれた）それまでよくわからなかったけど、そのときどれだけ小さく生まれたかはじめて考えた。普通の子じゃなくても自分なりにがんばればいーやと思った。」

「俺が親だったら心配。自分が生まれる前に2匹の猫を飼っていた。黒とトラ。トラが弱く、黒元気。でも黒が死んだ。母が身代わりかもしれない。俺もそう思った。」

「私はすぐに退院できなかったけど、いろんな人に退院までお世話してもらったので感謝しなきゃ。腕白だった話はそんな子だったんだと思った。入院中の（看護師さんとの）交換日記を読ませてもらった。ミルク1m飲んだだけなのに看護師さんも母もすごく喜んでた。」

「（双子のもう一方に）全部のっもられてしまったのかなと思った。」（本児は出生時から現在まで体格差のかなり大きい双子である。）

「同じ学年の友達も好きだから未熟児で良かった。」（本児は、早産のため1学年繰り上がった。）

2) 小さく生まれたことの影響

小さく生まれたことが現在の自分に影響があるか、あるいはないかについて、ある場合にはそのことがらについての回答を求めた。その結果をまとめると表7のとおりである。

表7 極低出生体重児で生まれたことによる影響

	人数	%
ない	24	58.5
身長が低い(4)体が小さい(2)体重が軽い(1)	7	17.1
わからない	2	4.9
食事が遅い/目が悪い/体が硬い/足が悪い (歩行可能な麻痺)/障害ゆえに学校でい ろできないことが多い(歩行可能な麻痺)	各1 (×5)	12.2
小さく生まれたのに周りの子と同じように 勉強して、運動して私ってすごい/すごいな あと思う。よくここまで成長したなあと思う 不明	各1 (×2) 1	4.9 2.4
合計	41	100.0

IV. 考察

1. 自己知覚尺度の結果から

(1) 対象児の自己知覚の特徴

全体的に肯定的な評価であり、標準化児童版の結果と比べて差がみられず、同様の結果であった。

ただし、男女ともに、学業と運動の評価が他の側面と比べてやや低い。さらに、児童版（眞榮城ら, 2007）と繁多・眞榮城（2003）の中学2年生の結果と比較した結果、男女ともに運動の評価が低いことが特徴的といえる。

このことは、本研究の対象児が9歳時の発達研究^{5) 6)}において、本人、保護者、担任教師の評価において一致して示された運動面の苦手さと結びつくものと考察された。対象児は、運動能力に弱さをもつと同時に苦手意識も強くもっているといえる。

なお、体格や容姿に対するいじめ等の相談を経験しているため、容姿についての評価が低いのではないかと予測されたが、本研究においては、児童版（眞榮城ら, 2007）と繁多・眞榮城（2003）の中学2年生の結果と比べて、有意差は認められず、むしろ平均値は高く、仮説は支持されなかった。

各側面間の関連については、5側面の上位概念と考えられている全体的自己価値感には、容姿の評価が最も強い関連があることが明らかになった。同様の結果は、児童版においても認められている。自分自身の容姿を肯定できることが全体としての自分自身を受け入れやすくなることが推察された。また、児童版の結果と異なったこととして、対象児においては、全体的自己価値感には道徳性に加えて、学業の評価も関連があることがわかった。

そこで、WISC-III知能検査との関連についてみると、学業の評価のみ関連性が認められた。知能検査結果が高い方が対象児自身による学業の評価も高い。ただし、知能検査結果については、言語性IQとその下位群にあたる言語理解群、注意記憶群に相関がみられ、動作性IQやその下位群の知覚統合群、処理速度群にはみられなかった。対象児の知能検査結果の特徴として、これまでの研究^{5) 6) 9)}で、言語性と動作性の乖離が大きく、言語性が優位であることを報告してきた。対象児自身の学業評価との関連においても言語性IQとの関連が強いことが特徴であることは興味深い結果であった。

(2) 性別と年齢段階の特徴

児童版（眞榮城ら, 2007）と繁多・眞榮城（2003）の研究からは、児童期と中学生時期の自己評価は男児の方が女児よりも高い特徴が認められた。中でも各年齢に共通して運動能力評価と容姿評価には、有意な性差が認められている。ちなみに Harter (1985, 1988) によるオリジナル研究においても、運動能力評価と容姿評価において男子が女子よりも高い得点を示している。

本研究の対象児においては、有意な性差は認められな

かったが、全般的に男児の平均値は女児よりも高いこと、中でも運動能力評価は男児が女児よりも有意に高い傾向がみられ、対象児の特徴もこれまでの先行研究と一致するものと考えられる。容姿評価については、男子が女子よりも評価が高いという点では一致するが、有意な差は認められなかった。本研究の対象児数は、十分とはいえないため、今後人数を増やし再検討したい。

年齢段階の特徴としては、繁多・眞榮城（2003）や他の自己意識についての研究⁷⁾⁸⁾において、児童期から中学生時期においては、年齢が上がるに連れて自己評価が低くなるという特徴がみられる。対象児は中学生であるが、児童版の小学5年、6年生の結果と比べ、各側面の平均値はほぼ同様の結果であった。同尺度を使用した日本の中学生の研究がないため厳密な比較はできないが、繁多・眞榮城（2003）の中学2年生の結果と比べると男子は運動、女子は運動と道徳性以外は平均値が高かった。対象児の評価が、極低出生体重児ではない中学生と比べてどのような状態にあるのか、同尺度で調査を使用した対照群との比較を行う必要があり、今後の課題である。

(3) 自己知覚と関連するその他の要因

出生時の体重や在胎週数との関連は認められなかったが、現在の体格との間には一部関連が認められた。

まず、対象児の現在の体格を全国平均と比較する。

全国調査¹⁰⁾による14歳の平均身長及び体重は、男子が165.1(±6.71)cm、54.2(9.94)g、女子156.6(±5.30)cm、49.9(7.61)gである。対象児の平均は、男女ともに平均の1SD前後に位置し、小柄であった。

男子は、現在の体重が大きい方が学業の評価は高いという特徴がみられた。学業は全体的自己価値感との相関も高いことから、男子の場合は体重に注目することの必要性を示唆する結果と考える。しかし、体脂肪と運動能力に負の相関がみられるため、体格のバランスも重要であるといえる。

女子は、体重や体脂肪が小さいほど容姿の評価が高いという結果が認められ、多くの女子がもつと言われているやせ願望と結び付く結果が認められた。容姿の評価は、全体的自己価値感に最も影響力をもつ側面であるが、女子の場合は、過度なやせ願望等につながらないように留意する必要性を示唆する結果と考える。

2. インタビュー調査の結果から

今回行ったインタビューは、健診時間に制限があり、十分に聞き取ることができるとはいえないが、対象児が語ってくれた言葉をできる限り大切にしたいつもりである。その分析結果から以下の考察を行った。

(1) 自分の長所や短所について

長所は、「優しい」が最も多く、「あきらめない、最後までやる、がんばる」、「明るい」の三つで約半数を占めた。質問すると多くの子どもはすぐには答えず、躊躇し

たり、恥ずかしがる様子をみせた。しかし、回答を励ましながら粘り強く聞くとようやく答えてくれる児が多かった。しかしそれでも、「ない」(3人)、「わからない」(5人)と答えた児が約20%存在した。何もないという児に対しては、「親や教師、友人に褒められることは？どういったこと褒められる？」という質問を投げかけたため、他者評価による長所も「ない」、または「わからない」と答えた児たちといえる。自分の長所を自ら口にするこゝへのためらいや恥じらいはあるにしても、一つも「ない」、「わからない」という回答は残念に思われ、気になる結果であった。

短所は、長所に比べると回答しやすい印象であった。「すぐ怒る、切れる」が最も多かったが、長所が一般的、あるいは抽象的な表現が多いのに対して、短所は具体的な行動や性格特性を取りあげる傾向がみられた。普段親や教師に注意される事柄を答えている児が多いようであった。

これらのことから、子どもたちは日常生活のなかで、親や教師、友人に行動や態度、性格などの悪い面を指摘されることは多いが、良い面を具体的にほめてもらう機会が少ないのではないかと考察された。

(2) 極低出生体重児で生まれたことについて

自分が小さく生まれたことは全ての児が知っていたが、小さく生まれたことについての説明を聞いた時期については、記憶があいまいな子どもが多かった。しかし、小学校の中学年あたりで、自分史を書いたりアルバムを作ったりするという学校の課題がきっかけで話を聞いたという回答が四分の一の児にみられた。話は半数以上が母親から聞いたと回答し、「(すごく)小さかった」という説明を受けた児が最も多かった。具体的な体重や手の平にのるくらいと言ったり、手で大きさを示したりして説明をされた児もいた。その説明を受けた時にどう思ったかについては覚えていない児も多かったが、「ふーん、そうなんだ」と特別な感情を語らない児も多かった。しかし、びっくりしたという感想や親への感謝の気持ちや入院中お世話になった人への感謝の気持ち、体に問題がなくて幸せなど、個別のさまざまな感想も聞かれた。中には、出生時も現在も体重差のある双生児で、現在の体格がかなり小さい児が「(もう一方に)全部のつとられてしまった」という心が痛む感想を語る児もいた。今回のインタビューは、十分に聞きとれていないため考察は難しいが、説明のされ方によって自分の小さく生まれたことへの認知に違いが生まれるのではないかと考えられた。

小さく生まれたことの影響については、「ない」という児が約6割であったが、体格が小さいこと、あるいは身体的な障害や問題に言及した児が約3割であった。一方、小さく生まれたのに、よくここまで成長したと自分に対して「私ってすごい」という発言が2名にみられた。このようなポジティブな受け止め方がどのように形成され

たのか、またこのような受け止め方が全体の自己評価とどのように関連しているのか等、今後さらに事例数を増やして検討したい。

V. 結語

対象児の自己についての評価は全体的に肯定的な評価であり、標準化児童版の結果と比べて差がみられず同様の結果であった。体格などを理由にいじめられる子どもがいることから対象児の容姿の評価が低いのではないかという仮説は支持されなかった。ただし、男女ともに、学業と運動の評価が他の側面と比べてやや低く、特に運動の評価が低いことが特徴的であった。これは、これまでの対象児の発達研究において明らかにされていた学童期の運動発達面の苦しさや苦手意識と結びつくものであった。

なお、全体的な自己価値感には容姿の評価の関連が最も強く、これは一般の児童・生徒の特徴と一致するものであった。女子については、現在の体重と体脂肪が小さいほど容姿の評価が高く、過剰なやせ願望とつながらないように留意する必要性が示唆された。

インタビュー調査からは、小さく生まれたことに対して6割の子どもたちは現在の自分にとって影響はないと捉えているが、3割の子どもは体格や身体的な障害や問題に影響していると捉えていることが明らかにされた。小さく生まれたことへの思いは、そのことについての説明され方によって影響を受ける可能性が示唆された。

このように思春期年齢を迎えた対象児の自己意識の特徴が捉えられたことは、対象児の心理・社会的な発達を理解するために意義のあることと考える。

VI. 今後の課題

今後、さらに対象児の人数を増やし、極低出生体重児の自己意識について検討を重ねていくことが課題である。同時に、対照群との比較を行うことで、極低出生体重児の特徴を明らかにしていく必要があると考える。また、今回使用した自己知覚尺度が本対象児に対して適切なものであるのか、項目の再現性の検討など詳細な検討をすることも課題である。

さらに、対象児の自己意識の特徴がどのような要因で形成されるのか、形成過程についても検討していきたいと考えている。

【謝辞】

本研究を行うにあたり、検査に協力してくださったお子様と保護者の皆様に心より感謝申し上げます。今後も研究の成果が少しでも発達援助に繋がるよう努力を重ねていきたいと思ひます。

また、本研究の検査の実施に協力していただいた愛育病院スタッフのみなさまに深く感謝申し上げます。

文献：

- 1) 眞榮城和美, 菅原ますみ, 酒井厚, 他. 改訂・自己知覚尺度日本語版の作成—児童版・青年版・大学版を対象として—. 心理学研究. 第78巻 第2号, 182-188, 2007
- 2) WISC-III刊行委員会訳編著 日本版 WISC-III知能検査法. 日本文化科学社 1998
- 3) 繁多進, 眞榮城和美. 現代中学生こころの発達—学校適応・精神的健康と自己評価との関連—. 研究年報, 第27号, 財団法人 成長科学協会, 283-293, 2003
- 4) 眞榮城和. 自己評価に関する発達心理学的研究—児童期から青年期までの検討—. 白百合女子大学大学院文学研究科, 発達心理学専攻博士論文, 2003
- 5) 安藤朗子, 高野陽, 川井尚, 他. 極低出生体重児の発達研究(5)—9歳時(小学校3年)の発達状況について—. 日本子ども家庭総合研究所紀要, 第45集, 311-318, 2009
- 6) 安藤朗子, 平岡雪雄, 川井尚, 他. 極低出生体重児の発達研究(6)—小学校3年(9歳)時の知的発達状況と家庭及び学校生活との関連について—. 日本子ども家庭総合研究所紀要, 第46集, 257-264, 2010
- 7) 柴田玲子, 根本芳子, 松崎くみ子, 他. 日本におけるKid-KINDL^R Questionnaire(小学生版QOL尺度)の検討. 日本小児科学雑誌 107巻 11号, 1514-1520, 2003
- 8) 松崎くみ子, 根本芳子, 柴田玲子, 他. 日本における「中学生版QOL尺度」の検討. 日本小児科学雑誌 111巻 11号, 1404-1410, 2007
- 9) 安藤朗子, 高野陽, 川井尚, 他. 極低出生体重児の発達研究(4)—6歳時(就学前)の発達状況について—. 日本子ども家庭総合研究所紀要. 第44集, 317-323, 2008
- 10) 文部科学省 年齢別身長・体重の平均値及び標準偏差、身長・体重の年齢別分布 平成23年度学校保健統計調査 [www-start.go.jp](http://www.start.go.jp), 2012.3.23公表
- 12) 安藤朗子, 高野陽, 川井尚, 他. 極低出生体重児の発達研究(1)—修正1歳6か月児の発達状況について—. 日本子ども家庭総合研究所紀要, 第41集, 225-233, 2005
- 13) 安藤朗子, 高野陽, 川井尚, 他. 極低出生体重児の発達研究(2)—就学前までの発達とSGAとの関連について—. 日本子ども家庭総合研究所紀要, 第42集, 211-236, 2006
- 14) 安藤朗子, 高野陽, 川井尚, 他. 極低出生体重児の発達研究(3)—3歳児の発達状況について—. 日本子ども家庭総合研究所紀要, 第43集, 281-288, 2007
- 15) 安藤朗子, 栗原佳代子, 川井尚, 他. 極低出生体重児の発達研究(7)—6歳から9歳にかけての知的発達の推移と幼児期の発達との関連について—. 日本子ども家庭総合研究所紀要, 第47集, 337-344, 2011

付録【領域別 自己知覚尺度の項目】 数字は、質問紙の項目 No.

学業能力評価

1. 勉強がとてよくできると思う
7. 同じ学年の友だちと同じくらい頭が良いと思う
13. 学校の勉強を終わらせるのがとても遅い
19. 勉強したことをすぐにわすれてしまう
25. クラスですること（勉強と学級活動などの両方が入ります）をとてよくする
31. 授業中に問題をとくことはむずかしい

運動能力評価

3. スポーツならなんでもよくできる
9. スポーツがもっとよくできたらいいのと思う
15. はじめてする屋外のゲームはうまくできない
21. 同じ学年の友だちよりもスポーツがよくできると思う
27. ゲームやスポーツはするより見ている方だ
33. したことのない運動でもうまくできると思う

容姿評価

4. 自分のすがたに満足まんぞくしている
10. 自分の身長と体重に満足まんぞくしている
16. 自分の体つきがちがっていたらいいのと思う
22. 自分のすがたが今とちがうといいのと思う
28. 自分の顔や髪のため・感じがちがっていたらいいのと思う
34. 自分はハンサム・美人である

友人関係

2. 友だちをつくることはむずかしいと思う
8. たくさんの友だちがいる
14. もっと多くの友だちがほしいと思う
20. 何かするときはいつもたくさんの友だちと一緒にする
26. もっとたくさんの同じ学年の友だちが自分のことを 好きでいてくれたらいいのと思う
32. 友だちに人気がある

道徳性評価

5. 自分のやり方が気に入らないことがよくある
11. いつも正しいことをする
17. こうした方がいいとわかっているように行動する
23. いつも自分のすることが問題をおこす
29. やってはいけないとわかっていることをする
35. とてもおぎょうぎがよい

全体的自己価値感

6. 自分を不満ふまんに思うことがよくある
12. 自分の生き方が好きではない
18. 一人の人として自分に満足まんぞくしている
24. 自分のような人が好きだ
30. 今のままの自分にとて満足まんぞくしている
36. 多くのことをするときの自分のやり方に 満足まんぞくしていない